

山桜の里 戸赤

区長ら全員再選

平成30年度戸赤区総会(30.3.18)



区長をはじめ役員全員が再選された平成30年度戸赤区総会(30.3.18)は、3月18日開催されました。事業報告の中で入山券売上成績1位室井正司、2位星輝夫、3位小椋俊幸、4位小椋一、5位星隆雄(敬称略)が発表され、報奨金の復活が話題となったものの財源の関係から今後の努力目標的扱いとなりました。区費、非居住者の協力金単価などの変更もなく原案可決となりました。やまざくら学校、木地工房、炭焼き施設の実行委員会会計も報告され、入込数、売上金額はいずれの部門も前年を下回りました。

消防団員は現在2人で、以前から退団の意向が示されており、消防団本部との話し合いを煮詰め、有事の際の受け皿を早急に整える必要性が確認されました。

星隆雄



30.3.10 総会に向けた会計監査と役員会



やまざくら学校の裏側屋根

今度は大丈夫

指定管理制度で町が修繕

雪害で修繕開始

2019/03/11 09:44

谷を撤去した修繕後

2019/03/24 15:19

【本地の学習No.78】「年行司廻帳」は天保三辰年で終わっている。これからが大飢饉の始まりであり、藤右衛門の椀座も閉鎖されてしまったと伝えられている。木地小屋もすべて散逸してしまった。八幡講連印九名は、すべて氏子駈帳に記載されている。鳴子中山村山、赤倉村朝日山(現・山形県最上町)、同じく一勿山の三ヶ所の木地山で、互いに近距離にある木地山で講を組織している。中山では木地師友五郎屋敷は特定できるが、赤倉では木地師に関する伝承がないため木地小屋の所在は不明である。八幡講に参加していない木地山も、八幡講の木地山を含めて互いに緊密な関係を保っていたことは想像に難くない。…前述した蛭谷氏子駈帳の木地師は、信州渡木地師であったことは間違いない。そしてこのうちの幾人かは天保の大飢饉以後移動を重ね、羽後木地山のコケシ業へ、あるいは川連の木地業へ定着し、その名をとどめている。…それぞれの木地小屋の木地供給地と塗仕出人との関係からすれば、お互いに近い距離にあった方が何かと都合がよいはずである。このように考えると、藤右衛門の椀座に木地を供給したのは鬼首山木地師ということになってくる。もっとも一概に距離のみをもって取引先を云々できないことも当然であるが、今後の課題となりそうである。以上述べてきたのは蛭谷氏子駈帳の信州木地師のことであるが、この外にもやはり、鬼首周辺から秋田雄勝郡にかけての南部木地師も含めた、帳外の木地師の存在も考えなければならない。(会津地方歴史民俗資料館「木地語り」より) (続く)



30.2.4集会所、消防屯所の雪下ろし



歳の神

やまざくら
祭りのため
役員会
4/7
午後
6時30分

れきの
ひとコマ



井戸沢橋の河川断面が小さく洪水の恐れがあるとされていた不安は解消された

長年の要望が実現。
道路の巾が広がり、カーブは緩やかに。学校近くに駐車スペースも確保できて、便利さは何倍にもなった。

井戸沢の河床が低くなって完成



(ストーリー性のある村づくりのために[No.46] 会津郡衙 国郡には国司、郡司が国や郡の行政を司る役所が置かれた。国は国衙(こくが)、郡は郡衙(ぐんが)という。なお国衙の所在地を国府という。陸奥の国の国府は多賀城(宮城県多賀城市)で、神亀元年(724)に築かれた。多賀城の直前の陸奥国府は郡山遺跡(宮城県仙台市)と考えられている。郡衙は、郡庁・官舎・厨家・厩・正倉などから構成され、隣接したところに郡衙に付属した寺院を建てる場合もあった。会津郡の郡衙の所在地は、会津若松市河東町郡山に所在する郡山遺跡が有力視されるようになってきた。発掘調査により、柱列、土杭などの遺構が検出され、「會」と墨書きされた須恵器の坏、平瓦・丸瓦などが出土している。須恵器は会津若松市大戸町雨屋・南原地区に所在する大戸窯跡で生産されたものと考えられている。瓦については産地、年代ともまだ明らかになっていない。会津の古代の瓦窯跡は会津若松市一箕町大字鶴賀の山口遺跡のみで、窯跡の年代は出土した「複弁蓮華文軒丸瓦」の文様や製作技法から七世紀末から八世紀初頭に位置づけられている。ここで生産された瓦の供給先は不明である。この時代、瓦を用いる建物は国衙・郡衙などの官衙や寺院などに限られている。山口瓦窯産の瓦は会津においてまだ出土例がなく、郡山遺跡出土の瓦についても山口瓦窯産とは断定されていない。郡山遺跡が機能した年代は、遺構・遺物から八世紀の初頭から一〇世紀と考えられている。(「下郷町史-第7巻通史編(発行・下郷町)」より出典) (続く)